２０２０年度　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　2020年12月

　　　　　　　　　　　　**第二十五課　クリスマスの意味**

人々は心の奥底にある憧れに導かれるように、多くの人がクリスマスに教会を訪れます。クリスマスは人々の心に温かいもの懐かしいものをもたらす心のふるさとのようなものです。それは、イエスは人々の心に生きているからです。

「主は御座を高く置き、なお低く下って天と地をご覧になる。弱いものを塵の中から起こし、乏しい者を芥の中から高くあげ、自由な人々の列に、民の自由な人々の列に返してくださる」詩編113：5～8

初代教会の信徒はイエスの誕生を祝うことはありませんでした。同じ時代に生きていたイエスの存在はまぎれもない事実だったからです。彼らにとっては、イエスが十字架にかかり三日目に復活されたことが最も重要でした。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書はイエスの受難と死と復活について詳しく記していますが、イエスの誕生の物語はマタイとルカのみが描いています。時の経過の中でイエスを知らない人々が現れ、「イエスは人間としてしか存在しなかった」という者が現れたから、マタイとルカはイエスの誕生物語を書きました。「昔々あるところに」という物語ではなく、神の御独り子であるイエスは、人間として人間の歴史の中に生まれた事実を強調しています。

西暦を数えるにあたり、イエスの降誕を基準とするようになったのは６世紀に入ってからのことです。

Ⅰ　イエスの生まれた時代背景

1. イスラエルは外国勢力と自治勢力による二重支配構造を持っていた。

最初のローマ皇帝アウグストスは（在位ＢＣ２７～ＡＤ１４）、ローマ直轄領となったＡＤ６年に、シリア州総督キリニウスがユダヤの戸籍調査を行っている。（ローマ帝国全土の戸籍調査ではない。）

1. イエスの生まれたときのユダヤの王、ヘロデはローマ帝国の権力争いの中で、陰謀と策略をもって地位を築き上げた。紀元前４年に死去。
2. 外からの圧力に対して、イスラエルのアイデンティティーを確立するため、律法と聖書がユダヤ教の中心を占めるようになる。
3. ローマ人による占領や圧政という政治的、社会的困難に加えて、ユダヤ指導層による差別に直面した一般民衆は貧困と抑圧に苦しむ。この圧迫の歴史が、神が介入して救ってくださるという、救い主の待望を燃え上がらせた。

Ⅱ　クリスマスの意味

【マタイとルカの違い】

マタイ2：1「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベトレヘムでお生まれになった。」力や権力によらない救いの到来、イエスが平和の王が我々と共にあることを告げる。

ルカ2：1「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令

が出た。これはキリ二ウスがシリア州の総督であった時に行われた最初の住民登録である。」

【共通のメッセージ】

小さく弱く貧しくなってきてくださったイエスが、この世界の小さく弱く貧しくされた者たちに慰めと解放を与える救い主である。

Ⅱ　クリスマスの意味　―　マタイとルカの誕生物語

テキストを比べながら読んでみましょう。

イエスの誕生の次第は別々の話のようである。マタイでは、マリアとヨゼフはもともとベツレヘム在住、そこでイエスが生まれる。ヘロデ王の殺意を恐れてエジプトに避難。王の死後王の息子を恐れてベツレヘムに帰らずナザレへ移住。ルカはどうでしょうか？

「ほんとうのこと」と「もっとほんとうのこと」タゴール

　１．「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。**その名はインマヌエルと呼ばれる**。」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（マタイ1・23）

　　　神はイエス・キリストにおいてこの世界に来られ、人々と出会い、人々と共におられる。断ち切られた関係が回復し、神と人とがともにあることができる、人と人との愛の交わりが回復されることを告げている。

1. ベツレヘムでの出来事

「**これがあなたがたへのしるしである。**」（ルカ2・12）

　　救い主が最も貧しく、最も無力な人々の一人となり、人々の貧しさや弱さを御自分　の身に負うことのしるしである。

キリスト教は不思議な宗教である。聖書は数々の奇跡や美しい説教を書き、人間イエスの偉大さを伝えているが、キリスト教の中心にあるのは、飼い葉桶に寝ている幼子という最も弱く貧しい姿の中に神の最高の救いを見ることにある。イエスの生涯の最後もまた、十字架の木に釘づけにされ、苦しむ無力な姿である。ここに神の最高の救いが成就したのである。イエスの誕生物語は、その**生涯全体の意味を表す象徴的な物語**である。

「飼い葉桶に置かれたイエス」

「飼い葉桶」とは家畜が餌を食べるところである。イエスが生まれてすぐ、いわば食事をする飼い葉桶に寝かされたことの意味を考えてみよう。いのちのパンとなって、御自分をたべものとして差し出すイエスの姿が髣髴として浮かび上がる。

* ―毎日がクリスマス―(Ｋ．ラーナー)

毎日の生活の中で、クリスマスの「しるし」を探そう。

わたしたちの救いに通じるような小さなしるしは何か。

* 受肉；キリストは完全に神でありながら人となられたということ。

無限である神が有限なものとなり、無限なものへ介入したということである。

３．不思議な星を見て信じ旅に出た学者たち。「自分の発見」に自分を賭ける。

　祭司長や律法学者たちは聖書の知識があり、救い主が誕生する地について正確に応えることができた。しかし８キロしか離れていないベトレヘムへ出て行こうとはしなかった。ヘロデも自分で出かけず人に確認させるタイプの人間。もし彼が自分で出かけて自分で幼子に会って礼拝していたら、彼の人生は全く違った人生になっていただろう。世界の歴史も変わったかもしれない。

1. 羊飼いたちを照らした光；イエスの誕生を一番先に知らされたのは羊飼い。

真っ暗な闇の中に光が差し込むように、神の愛のわざが始められた。

イエスが生まれたのは夜だったか昼だったのか誰も知らない。イエスの誕生という出来事を通して、闇の中から光が輝き出る。神がわたしたちのもとに近づいてこられ、わたしたちの救いのために何かをなさろうとしておられることの象徴である。

闇　毎日の生活を脅かす闇；利潤と業績を追い求める競争社会の中で、人々はますます忙しく、疲れ、人間らしい関わりを失い、孤独観にさいなまれている、世界の闇。

光　イエスの誕生；闇に光が輝く出来事。

**「**言葉のうちに命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中に輝いている暗闇は光を理解しなかった。」ヨハネ1:4～５

1. 「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思いめぐらしていた」

“人生のさまざまな出来事は問題か神秘か、どちらかである”

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　―ガブリエル・マルセル―

私たちの救いのために神がご自分の方から近づき、新しい価値観を生き方で示してくださる。クリスマスは毎日新たにわたしの周りに起こっている新しい創造である。

* イエスの誕生はいつか？

イエスが歴史の中に誕生したことを強調。ルカは人口調査のあった年をイエス

の誕生の時とする一方で、イエスをヘロデ大王の治世に生まれたとしている。

この矛盾に対して；「おそらくこの人口調査をイエスとの関連で持ち出したのは、イエスの誕生を世界史的枠組みに入れようとする、ルカ個人の編集作業であろう。」（岩波版　荒井献・佐藤研編集『新約聖書全５巻』（新約聖書Ⅱ）

* クリスマスはなぜ１２月２５日であるのか？

ミトラ教の太陽神を祝う「冬至」を取り入れ、１２月２５日をクリスマスとした。キリストのもたらす光を象徴するお祭。

　寒さに弱い羊の夜の放牧は１１月ごろまでである。ではなぜクリスマスを１２月と

したのか？イエスが生まれた日はいつだったのか誰も知らない。夜が一番長くその

日から少しずつ昼が長くなっていく冬至を太陽の祭りとして祝っていた異教徒の習

慣をそのまま取り入れ、太陽であるキリストの誕生を１２月としたという見方がふ

さわしいようである。

Ⅲ　イエスの誕生によって世界はどう変わったか。

２０００年が経った現在、世界は本当によくなったといえるか？絶えまない戦争、不正、地球環境問題、弱い立場の人々が飢え、傷つき、命を失っている厳しい現実がある。イエスがこの世界においでになったことの意味はなかったのであろうか？

イエスが来られる前と後の世界の決定的違い

多くの苦しみと悲しみを抱える世界は、イエスの到来によって「ともにいてくださる神」を持ったということである。詩編46にあるように、以前から神は我々と共におられた。しかし、イエス・キリストにおいて神はこの世界に入ってくださり、はるかに直接的にともに歩んでくださった。「神ともにいます世界」になった。

人生の旅路、行き先が分からなくなると不安になります。だれか道のわかった人がいて

くれたら先へ進めます。一人ではとうてい無理に思える遠い道のりであっても、そばに

いて励ましたり行く道を示してくれる人があったら歩み通せるのです。世界はそのよう

なともに歩まれる神、イエスさまをいただいたのです。これがクリスマスの本当の意味

です！